

[国 語]

## 漢字学習の意欲を高める個に応じた指導の工夫

－漢字の成り立ちに注目した個別指導－

村田 裕昭\*

### 1 主題設定の理由

毎年、担任をするクラスでは既習事項の定着のため、月1回漢字テストを行っている。宿題や自主学習で期間内にドリルの範囲を全員が終わらせているが、テストの採点をしていると点数に大きな開きが出てしまうのが現状である。子どもたちは、漢字を覚える際に何を考え、どのような気持ちで漢字練習に取り組むのだろうか。どのように練習している子どもたちが、漢字練習の能率を高めるのだろうか。栗林(2009)は、次のように指摘している。

「確かに年間に200字近いペースで漢字を学習していくのは大変である。「テストのために仕方なく練習する。」「宿題だから決められた回数書く。」という意識のままでは、漢字学習への主体的な取組は、期待できない。」<sup>1)</sup>また、栗林(2009)は「学習教材を工夫して漢字そのもののおもしろさに興味をもたせ、児童の実態に応じた提示と支援を行えば、児童は意欲的に漢字学習に取り組み、漢字を主体的に習得することができるようになる。」<sup>2)</sup>とも指摘している。

しかし、栗林の研究は、子どもたちへの教師の働きかけに主眼を置いた研究であり、子どもたちが漢字を覚える際の、「何に意識を向けているのか」や「どんなところに注目するのか」という思考面については明らかにされていない。子どもたちは、漢字を覚える際に何を考え、どのような気持ちで漢字練習に取り組むのだろうか。それが分かれば、子どもたち一人一人に適した覚え方を教師が支援することができるのではないだろうか。根気よく何回も練習を繰り返しているのに、漢字を覚えることができない子どもに、的確な指示が出せるのではないだろうか。私は、子どもたちには頑張った分結果がついてくることを、漢字学習を通して実感してほしいと考えている。さらに、練習した成果を実感することで、漢字に親しみをもってほしいとも考えている。そのためには、「教師の働きかけだけでなく、子どもたちの漢字への意識を調べること」や「漢字に親しみをもって学習に取り組むことができるようにすること」が大切だと考えた。そしてそうすることで、習得率を無理なく向上させることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

### 2 研究仮説

各自の漢字練習の意識を把握し、子どもたち一人一人が、漢字の覚え方への様々なアプローチに気付くことで、漢字を身近な物として考え、習得率を向上させることができるだろう。

### 3 研究の内容と方法

#### (1) 研究内容

毎月行っている月例テストの後、子どもたちにどんなアプローチをして漢字学習を行ったかアンケートをとり、学習の仕方や感想、漢字学習の意欲を見取る。また、2回目以降は、前回のアンケートと比べながら記述する。その際子どもたち一人一人が、自身の漢字学習の仕方をふり返れるように指導する。その後の授業で、自分が決めた方法で漢字学習を進める。最後に、子どもたちの漢字学習への意欲と習得率をマトリックスに示し、月毎の子どもたちの漢字学習の意欲と習得率の変容を見取る。それによって、漢字へのアプローチの差異による漢字学習の意欲と習得率の変容を調査する。

#### (2) 研究方法

日本教育技術学会・基礎学力調査委員会の「小学校漢字習得状況の調査報告」<sup>3)</sup>によると、漢字習得を左右する要因は、「①学習意欲(好きか嫌いか)」「②生活環境(テレビの視聴時間)」「③学習教材、学習方法、授業での取り扱い」となっている。そして、この結果から栗林(2009)は、ゲームやクイズ、成り立ちに関する教材を自作することや、漢字の検定を行うなど指導の方法を整備することで、漢字への関心が高まり、習得率が向上することを明らかにしている。本研究では漢字への関心を高めるため、栗林と同様に、様々な漢字の覚え方や成り立ちを、クイズやゲーム形式で触れ

\* 魚沼市立入広瀬小学校

られる教材を自作する。そして、その教材を活用することで、子どもたちに漢字に対する様々なアプローチに気付かせる。その後漢字学習へのふり返り（「漢字の学習が好きか嫌いか。」や「どのようにして漢字を覚えたか。」、「今回の月例テストに向けた学習の楽しさは10段階でどれくらいか。」、「テストを終えての感想」）を月例テスト毎に行い、一人一人がどのようなアプローチで漢字を学習し、どのくらい意欲的に学習に取り組んだのかを見取る。それを受け、教材の使い方や子どもたちへの声かけを工夫し、各自が漢字学習の際に、自身に合った学習の仕方を見つけることができるようにしていく。

4 研究の実際調達

(1) 第1回の月例テストとアンケート結果の分析

① テスト結果とアンケート分析

第1回目の月例テストでは、テスト範囲の学習を、各自が家庭学習で行うようにした。教師からは何も言わずに、今までの学習の仕方ですべてに臨ませた。

図1は、一人一人の漢字学習の習得率と意欲を月例テストやアンケートからまとめたマトリックスである。表1は、各自の漢字へのアプローチの仕方をまとめたものである。習得率も低かったA児は「覚えるために何回もドリルをしたが、とても面倒だった。字を正しく書くことが難しかった。」と感想を書いていた。E児は、「漢字を正しく丁寧に書くのが難しい。」と感想を書いていた。次に漢字学習は辛いと感じているが、習得率の高かったB児は、「覚えられていなかった漢字があったから辛い。」と感想を書いていた。どのように漢字を覚えたのか聞きとりをしたところB児は、偏や旁からイメージをふくらませていることが分かった。漢字学習が楽しく習得率も高かったC児は、「漢字を書いているとすぐ覚えらるから漢字学習は楽しい。」と感想を書いていた。D児は、「漢字ドリルを頑張ったらテストができてよかった。」と感想を書いていた。C児に聞いてみると、漢字の成り立ちに関心をもっていることが分かった。

このことから、漢字は、ただくり返し練習するだけでなく自分で漢字の構成を考えたり、熟語や使い方を確かめたりしながら練習をするアプローチが効果的だと考えた。さらにそうすることで、C児やD児のように覚えらるることが楽しさにつながっていくことを期待し教材を自作することにした。

(2) 第2回の月例テストとアンケート結果と分析

① 自作教材の工夫

前回のアンケートとテストの結果から自作する教材は、次のような物でなくてはならないと考えた。それは、「漢字の構成や熟語を考えられる物」や「クイズやゲーム形式のできる物」、そして、正しく書くことに難しさを感じている児童もいるため、「横画や縦画の数や止め、跳ね、払いなどを意識できる物」である。そのような教材ならば、一字一字教師と児童がその漢字について考えを対話しながら漢字を学習でき、児童は、その時に自分で考えたことや教師や友だちから聞いたことから、漢字の構成や成り立ち、覚え方に意識が向き、漢字への関心が高まるだろうと考えた。

そこで、今回、新出漢字一字一字について成り立ちや教師自身が覚えた方法、間違いやすいポイントを画像やアニメーションを付けて説明するスライドを作った(図2～図5)。アニメーションを利用し、クイズの答えや漢字の足し算を、児童に答えを予想させた後で示すなど、ゲーム形式の活動もできるようにした。また、横画や縦画、止め、跳ね、払いについては、全員で学習時に確認できるように配慮した。

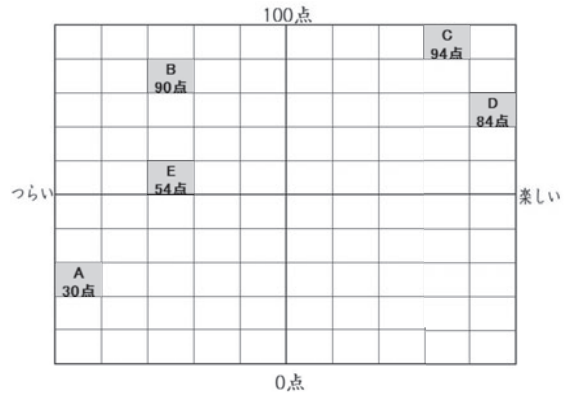


図1 第1回月例テストにおける漢字学習の習得率と意欲

表1 第1回月例テストにおける各自の漢字へのアプローチの仕方と習得率

名前	漢字へのアプローチ	5月月例テスト点数
A	ドリルを何回もする。	30
B	偏や旁など部首に注目して覚える。	90
C	何回も書く	94
D	送りがなと一緒を書く ドリルを繰り返す	84
E	何回も書く	54



図2 漢字の成り立ちや漢字の構成を考えるスライド



図3 漢字の覚え方や止め、跳ね、払いを確認するスライド



図4 クイズ形式で間違いやすいポイントを確認するスライド



図5 ○×クイズで画数に注目し、書き忘れを確認するスライド

② 教材の活用

教材を活用し、授業で新出漢字を成り立ちやクイズなどを取り上げながら漢字学習を行った。一文字ずつ児童と対話しながら漢字について考えるようにしたところ、児童の漢字学習への関心を高めることができた。書き忘れを確かめる〇×クイズでは、児童から「この場所に一画足りない。」や「これだと横画が多い。」といった発言がみられた。その後の書き順練習や書き取り練習でも、ドリルの手本を見ながら正確に練習する姿が見られた。成り立ちや意味を教えるスライドでは、「本当の話なの？」や「覚えやすい！」といった発言が多く見られた。また、「𠂔（さんずい）」や「𠂔（くさかんむり）」のようなたくさんの漢字に使われている部首（偏や旁など）が出てくると、児童から水や植物に関わる発言が出てきた。部首や文字の成り立ちを見つけ、一つ一つの漢字を考えていることが分かる発言である。また、家庭学習などで児童が考えることなく、漢字をただ書いて練習するだけにならないよう、授業のスライドの出し方を逆にして（図6）、児童にどのように覚えるかを考えさせた。画数がとても多い漢字や偏や旁などに分けられない漢字は児童には、難易度が高いが、部首がはっきりしている物や何度も学習した偏や旁で構成された漢字は児童だけでも十分に意味を考えることができた。実際「落」の漢字はどう覚えればよいと思うか。」と児童に授業で問いかけた時には、児童から「くさかんむりとさんずいがある。」とすぐに発言があり、次に漢字ドリルで「落」の字を調べた子が「落ちるの「お」と読む漢字だ。」と発言した。最後にそれを聞いていた児童が「草と水が落ちるという意味なのではないのか。」と発言した。そこまで発言させた後で、教師の方で、「各という字は、それぞれという意味があります。」と説明をしてスライドの「水や草がそれぞれ（各）落ちる」という言葉を映し出した。もちろん本当にこのような成り立ちではないだろうが、漢字の偏や旁から意味を考えることは、漢字へのアプローチとして有効だといえる。

③ テスト結果とアンケート分析

アンケートの結果は図7、表2のようになった。全体的に習得率が上がっているが、漢字への関心は上がっていない。A児は、「ドリルをしないと家で怒られるから漢字学習は辛い。」と感想を書いていた。B児は、「点数は上がったけどまだ分からない漢字があったから辛い。」と感想を書いていた。D児は、「漢字の学習は楽しいけど、練習は辛い。」と感想を書いていた。E児は、「合格できなかった（点数が80点以下だった。）から漢字学習は辛い。」と感想を書いていた。漢字の反復練習を頑張っても覚えきれなかった漢字があることが漢字学習へのマイナスイメージにつながっていることが分かった。また、漢字練習に対して辛さがあり、興味に意識が向いていないことが分かった。子どもたちに、より漢字のなりたちや部首を意識させる工夫が必要である。

(3) 第3回の月例テストとアンケート結果と分析

① 自分なりの漢字へのアプローチの可視化

前回のアンケートの結果から漢字練習となると辛さがあることが分かった。しかし、授業中の練習態度を見ると、とても熱心に書き取りをしている姿や、スライドを見て漢字のなりたちや部首に対して積極的に発言する姿が見られる。授業中の発言から、漢字学習の関心には、高まりを感じている。そこで、今までは授業中に教師が提示していた漢字へのアプローチを、子どもたち自身で考えられるようにワークシートを作成した。自身で漢字をどのようにとらえ、どんな点に注意してアプローチするのかを、今までの学習を思い出して書くことで、ドリルを繰り返すより効率的に、そし

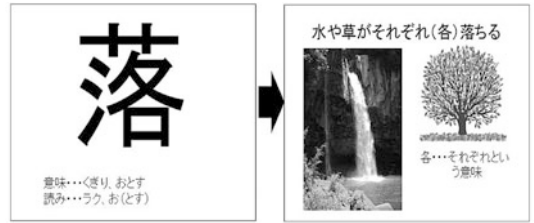


図6 スライドの出し方を逆にして覚え方を考える

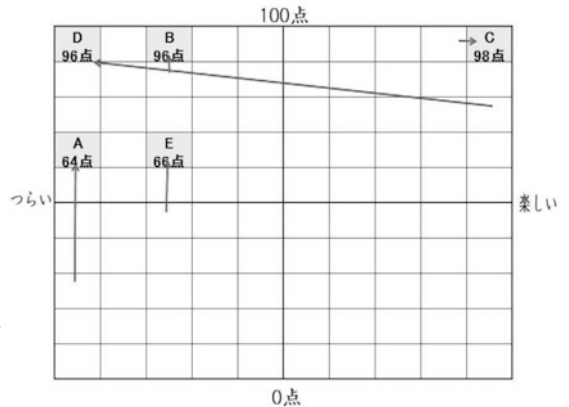


図7 第2回月例テストにおける漢字学習の習得率と意欲

表2 第2回月例テストにおける各自の漢字へのアプローチの仕方と習得率

名前	漢字へのアプローチ	6月月例テスト点数
A	ドリルを何回もする。	64
B	偏や旁など部首に注目して覚える。	96
C	何回も書く	98
D	偏や旁など部首に注目して覚える。	96
E	何回も書く	66

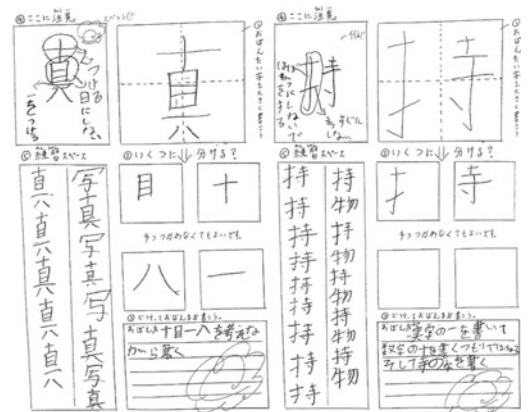


図8 自分なりに考えた漢字へのアプローチを可視化するワークシート

て漢字に親しんで学習ができると考えた。

### ② 各自のアプローチの活用（家庭学習での活用）

授業で教師の考えた漢字へのアプローチを知った後、自分がどのように漢字をとらえるかを考えるため、ワークシートを家庭学習で取り組ませた。また、自身でアプローチを考えることで漢字が印象深くなると考え、自身の覚えにくいと感じる字を選ぶことにした。

子どもたちが取り組んだワークシートを見ると（図8）、部首に注目したり、語呂合わせを考えたりしていることが分かる。止め、跳ね、払いを意識したり、横画や縦画の長さに気を付けたりする子も見られた。さらに、自身の取り組んできたワークシートを教室に掲示し、各自が見合うことで、「画数にも気を付けよう。」や「私も同じように覚えよう。」といった意識が生まれていった。

### ③ テスト結果とアンケート分析

アンケートの結果は図9、表3のようになった。A児は、「少し難しかったけど、81点で良かった。」と感想を書いていた。B児は、「テストが簡単だった。」と感想を書いていた。C児は、「漢字の学習が大好きになった。」と感想を書いていた。D児は、「全部は覚えきれなかったけど86点だったからよかった。」と感想を書いていた。ほとんどの児童が漢字に対して、「難しい」という意識が薄れていることが伺えた。

#### （4）第4回の月例テストとアンケート結果の分析

##### ① テスト結果とアンケート分析

第4回のテストに向け、子どもたちと、これまでの漢字学習をふり振り返りながら漢字練習に取り組ませた。アンケートの結果は図10、表4のようになった。A児は、「何回も書きなさいと親に言われ辛かった。」と感想を書いていた。B児は、「難しかったけど96点でよかった。」と感想を書いていた。C児は、「難しかったけど頑張った。」と感想を書いていた。D児は、「合格してよかった。」と感想を書いていた。E児は、「自分の思い通りに漢字を書けないので、難しかった。」と感想を書いていた。A～E児にどんなところが難しかったのか聞きとりをしたところ、全員、画数が多い漢字が多くて覚えることが大変だったと回答した。E児は、画数だけでなく、「漢字の字形のバランスがとりづらい。」とも答えていた。

## 5 考察

### （1）A児の変容「無意識から意識した反復練習へ。賞賛の必要あり。」

A児の漢字の習得率と意欲の変容（図11）を見ると、習得率の向上と意欲の変化が大きいことが分かる。A児は、漢字を苦手としており、漢字学習にとっても強いマイナスイメージをもっていた。第1回目の月例テストの学習の時は、期限までにドリルを終わらせるために反復練習を行う姿がみられた。しかし、教材を工夫し教師の漢字に対するアプローチを伝えたことで、授業では活発に発言するようになった。既習の漢字の組み合わせや部首に注目して自身が考えた覚え方を発表したこともあった。A児に漢字学習のしかたについて聞きとりをしたところ、「部首や習った漢字に注目して覚えると、とても覚えやすい。だけど親からは、何回も漢字を書きなさいと言われる。とても面倒になる。」と話していた。A児の漢字へのマイナスイメージには、保護者の言動が影響している。自分で考えた方法で漢字を練習し、できたことを賞賛し続ける必要がある。

### （2）B児の変容「漢字の構造に注目して、部首を覚える。」

B児の漢字の習得率と意欲の変容（図12）を見ると、習得率に比べ意欲が低いことが分かる。意欲は若干ではあるが、

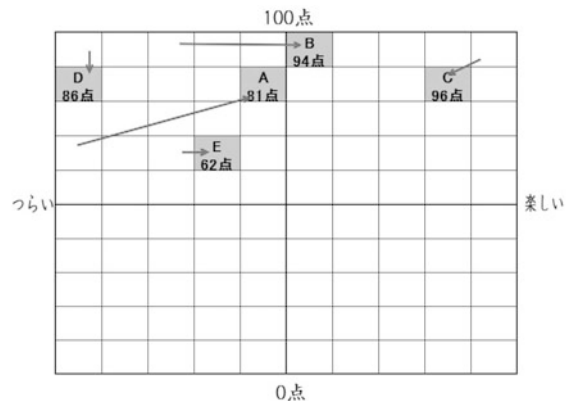


図9 第3回月例テストにおける漢字学習の習得率と意欲

表3 第3回月例テストにおける各自の漢字へのアプローチの仕方と習得率

名前	漢字へのアプローチ	7月月例テスト点数
A	偏や旁など部首に注目して覚える。	81
B	偏や旁など部首に注目して覚える。	94
C	何回も書く	96
D	偏や旁など部首に注目して覚える。	86
E	書き順を確かめながら書く	62

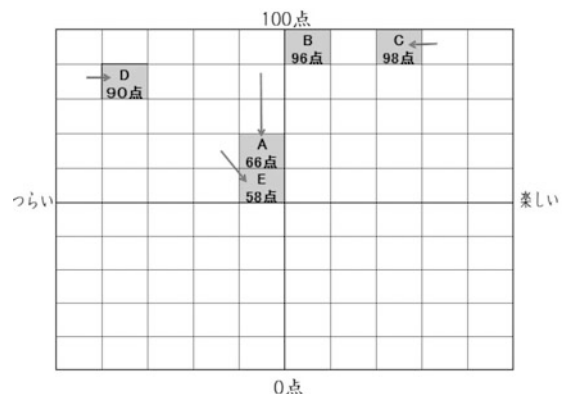


図10 第4回月例テストにおける漢字学習の習得率と意欲

表4 第4回月例テストにおける各自の漢字へのアプローチの仕方と習得率

名前	漢字へのアプローチ	9月月例テスト点数
A	何回も書く	66
B	偏や旁など部首に注目して覚える。	96
C	何回も書く	98
D	偏や旁など部首に注目して覚える。	90
E	書き順を確かめながら書く	58

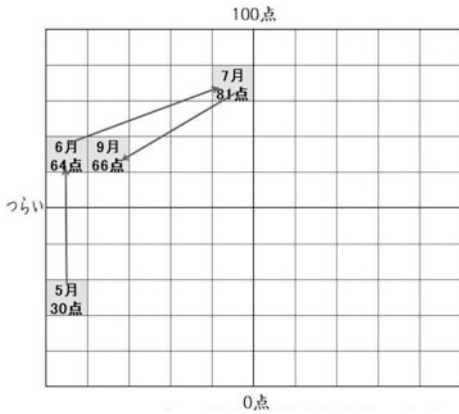


図11 A 児の漢字習得率と意欲の変容

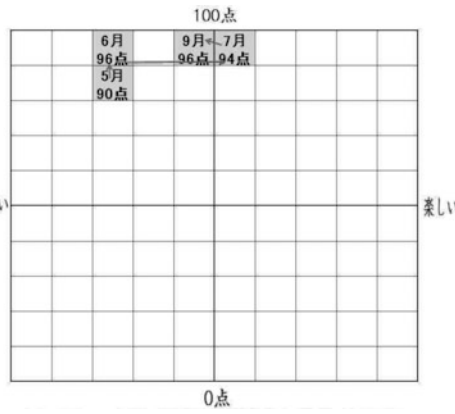


図12 B 児の漢字習得率と意欲の変容



図13 漢字の構造に注目して練習するB 児のノート

高まりつつある。B 児は、学年で漢字ドリルを一番早く終わらせる子であり、漢字学習への関心もとても高い子である。テストのための漢字練習について聞きとりをしたところ「何回も書いて覚えるのは、とても大変だから、部首や語呂合わせを考えながら練習をしている。学習は楽しいし、好きだけど、テストでは100点をとれないから、漢字を完全に覚えるのは大変。」と話していた。漢字へのアプローチを始めから「部首や成り立ちに注目する。」ことを選んでいた。漢字に対し自分なりのアプローチをし続け、漢字を覚えていたことが伺えた(図13)。完全に覚えられるよう、今後さらにアプローチを広げていく必要がある。

(3) C 児の変容「漢字のイメージを自分で広げていく。」

C 児の漢字の習得率と意欲の変容(図14)を見ると、習得率と意欲共に、とても高いことが分かる。しかし、少しずつ意欲が低下ぎみである。C 児は、漢字に対する関心が高く。毎回意欲的に漢字ドリルを進めていた。アプローチの仕方は、「何回も書く」だが、漢字学習の仕方について聞きとりをしてみると、「頭の中で、今までに習った漢字や部首を見つけて足し算をしながら書くと、すぐに覚えられる。書く度に自分が漢字を段々覚えてくるのが楽しい。だけど画数が多い字は練習が少し面倒になってくる。」と話していた。授業で教師の漢字へのアプローチを伝えたところ、とても関心を持ち、部首や漢字の意味をドリルで調べ、発言していた。教師が自作した教材から漢字へのアプローチを広げ、自分なりのアプローチを見つけて学習していたことが伺えた(図15, 図16)。

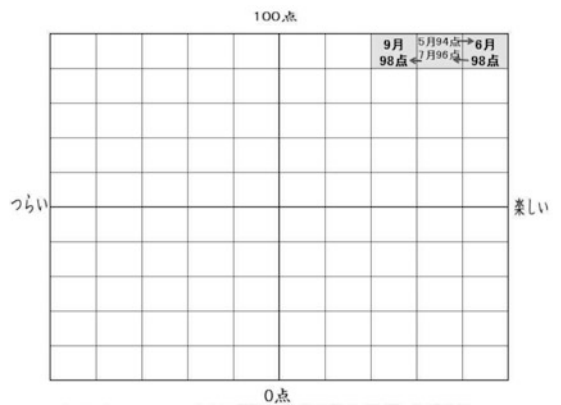


図14 C 児の漢字習得率と意欲の変容



図15 漢字の意味をイメージして練習したC 児のノート



図16 正しく書くために注意する所を決めて練習したC 児のノート

(4) D 児の変容「漢字を丁寧に見るようになったD 児。」

D 児の漢字の習得率と意欲の変容(図17)を見ると、漢字学習への意欲低下していることが分かる。D 児に意欲の変化について聞き取りをしたところ、「始めは、漢字があまり得意ではなかったけど、頑張ってドリルをしたらテストで合格(80点以上)できて、漢字を楽しいと思った。部首や成り立ちに注目するとすぐ覚えられた。だけど、段々画数が多い字が出てきて、練習がとても大変になった。」と話していた。D 児は、ドリルを毎回くり返し行っていた。D 児は、始め漢字へのアプローチを「何回も書く」としていたが、徐々に「部首や既習の漢字に注目する」ことに変えていった。練習は大変なものとも悟りながらも、部首や成り立ちに注目する漢字へのアプローチを習得していった。

(5) E 児の変容「正しく書くために画数や止め、跳ね、払いに注目する。」

E 児の漢字の習得率と意欲の変容(図18)を見ると、習得率は横ばいとなり、意欲は若干ではあるが、高まりつつある。E 児は、縦画の数や横画の数、止め、跳ね、払いなどを正しく見取ることが難しい子だった。字形のバランスがと

りづらく、字形の崩れた字を書いてしまうことも多かった。漢字学習について聞きとりをしたところ、「漢字学習自体は、きらいではない。ただ、自分のイメージ通りに書けない字があり、その字は、注意するところがたくさんあって、書き忘れが増えてしまう。総画数に注意して書き忘れをしないようにしたり、書き順を覚えるために何回も書いたりしている。全部覚えきれなくて、とても大変だけど、そうしないと覚えられないから頑張っている。」と話していた。どんな字が覚えやすく、どんな字が苦手かを聞いたところ、「相」や「習」といった完全に左右や上下に分けられる漢字については、部首や既習の漢字を見つけやすく、アプローチする視点を見つけやすいことが分かった。ただし、「題」や「開」、「屋」などの構造（にょう、かまえ、たれ）の漢字では構造を見抜くことが難しく覚えづらいことが分かった。また、「勉」や「局」といった「曲がり」や「折れ」、「払い」の入る漢字は、字形が崩れてしまい、自分のイメージ通りに書けないことが分かった。E児は、1、2年生で習う漢字を見つけたり、偏や旁に注目したりすることはできるので、根気強く既習の漢字の定着を図り、漢字の構造に慣れていくことが大切である。

#### (6) 成果と課題

A児やD児のように漢字へのアプローチが、テスト毎に変わっていった児童は、自分で漢字の部首や語呂合わせを考え、覚え方を見つけていくようになった。何回もひたすら書くだけでなく、漢字一字毎に注目して考えながら漢字を学習したことで習得率を向上させることができた。漢字を身近なものとして考えさせることができたといえる。

B児やC児のように習得率が高い児童には、教師の漢字へのアプローチの仕方を紹介したことで、授業での漢字学習で活発に発言するようになった。クイズ形式で漢字の間違いを探したり、意味や成り立ちの話を集中して聞いたりする中で、自分なりに漢字のアプローチを考えるようになっていった。

しかし、E児のように部首や成り立ち、構造をとらえることがそもそも困難な時があったように、多様なアプローチの仕方を紹介しても逆に漢字を複雑なものにしてしまうことがあった。漢字の構造や縦画、横画、止め、跳ね、払い、折れ、曲がりや正しく書けない子どもには、総画数や書き順に注意したアプローチが有効であろう。また、他にもより有効な漢字へのアプローチの可能性もある。様々な子どもたちに対して有効な漢字へのアプローチを子どもたちの声から探っていく必要がある。

また栗林（2009）と同様に、クイズやゲーム形式で漢字に触れられる教材を授業で活用したことで、漢字への関心を高めることができた。教師がそのような働きかけを行ったことで、子どもたちは漢字学習を行う際に授業を参考にして、自分なりに漢字へのアプローチを考えるようになっていった。授業から、「部首」や「成り立ち」、「止め、跳ね、払い」、「横画の数や縦画の数」といった漢字を学習する際のアプローチを積極的に活用する姿が見られた。

栗林（2009）のように「漢字そのもののおもしろさや奥深さ目を向けさせ、楽しみながら漢字を調べたり、まとめたりする活動に取り組みせることから授業改善を図る」<sup>4)</sup>ことは、子どもたちが漢字を学習する時、「何に意識を向けているのか」や「どんなところに注目するのか」という思考面にも刺激を与え、漢字へのアプローチを多様にしていくことを確認することができた。

#### 引用文献

注1) 栗林育雄, 教育実践研究第19集「漢字学習の意欲を高める指導の工夫」, 2009年

注2) 栗林育雄, 教育実践研究第19集「漢字学習の意欲を高める指導の工夫」, 2009年

注3) 日本教育技術学会基礎学力調査委員会, 「小学校学習漢字習得状況の調査報告」, 2007年

注4) 栗林育雄, 教育実践研究第19集「漢字学習の意欲を高める指導の工夫」, 2009年

#### 参考文献

下村 昇, 『生きている漢字 死んでいる漢字』 高文研, 2006年

白川 静, 『白川静博士の漢字の世界へ』 福井県教育委員会, 2011年

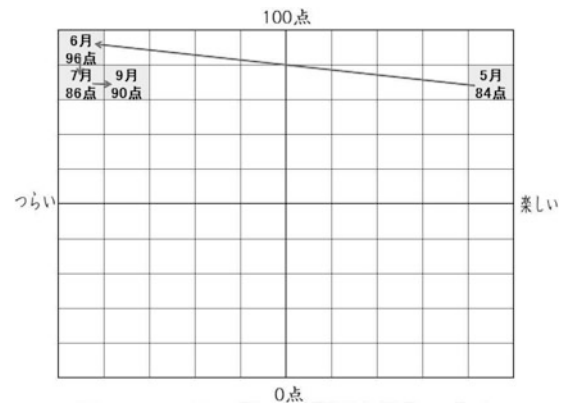


図17 D児の漢字習得率と意欲の変容

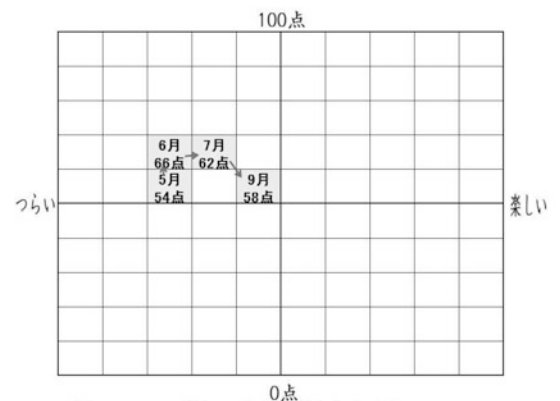


図18 E児の漢字習得率と意欲の変容